

中学校英語教科書におけるジェンダー・バイアス -機能文法を用いた分析-

鈴木 卓

1. はじめに

コミュニケーションを重視する言語学習が、必然的に文化の学習でもあることは広く指摘されてきた（例えば Byram, 1989; Jaworski, 1983; Valdes, 1986）. 中でも主教材として用いられる教科書は、学習者にとって目標言語だけでなく文化・社会総体に関する情報源として機能するから、もしそこに何らかのバイアス、つまり偏見や偏向が存在すれば、それは目標言語や文化に対する学習者の意識に少なからず影響を与えたと考えられる。

そのようなバイアスの一例として近年注目されているものに、ジェンダー・バイアス、すなわち社会的・文化的性差に基づく偏見や偏向、がある。L1(母語)教育, L2(第二言語)教育両分野において、従来使用されてきた教科書の多くに次のようなジェンダー・バイアスが存在することが報告されている（伊藤, 1999; Hartman and Judd, 1978; Jaworski, 1983; Kanemaru, 1998; Ma, 1998; Porreca, 1984）.

1. 視覚的要素(挿絵の中での登場頻度や大きさにおける性別上の不均衡, また例えば「女らしい」服装のように, ステレオタイプを強化するような描写)
2. テキストの内容(与えられる人格や社会的役割, ストーリー上の重要度などにおける性別上の不均衡)
3. 語彙要素(stewardess のように性を特定する語句, 対を成す表現における「男女」の順, man のような男性指示語句の総称的使用(中村, 1995), 婚姻状態を表す女性敬称など)

本論では日本の中学校一年生用の英語教科書を対象とし、機能文法を用いた節 (Clause) レベルでの分析を通じて、ジェンダー・バイアスの有無を調査する。中学一年生用の教科書を取り上げる理由は、これまでそれを対象とした研究が比較的進んでいないという状況に加え、中学一年が本格的な英語学習の開始時期にあたり、また学習者の年齢も低いため、教科書が学習者の意識形成に与える影響力が特に大きいと考えられるからである。また、機能文法を用いた節レベルでのバイアスの分析は比較的新しい手法であり、中学校英語教科書を対象とした研究では先例がないため、上記の1.～3.でまとめた要素とは異なった新しい知見が得られると期待できる。

文部科学省は、中学校学習指導要領 (平成10年12月告示, 15年12月一部改正) の中で外国語科目の教材について「多様なものの見方や考え方を理解し、公正な判断力を養い豊かな心情を育てるのに役立つ」べきであるという見解を示している。本論で分析対象とする教科書は文部科学省の検定を合格したものであるから、本論が、上の見解がジェンダーに関して実際の教材に反映されているかどうかを判断するための一材料となれば幸いである。

2. データと方法

この項では分析に用いたデータと方法を説明する。

2. 1 データ

本論では文部科学省検定済の中学校一年生用英語教科書一冊をデータとして用いた。「一人の女性や男性に関する一つの叙述は、偶然である可能性もある。継続・反復されるバイアスこそが累積的影響を持つ」(Lesikin, 2001: 275 鈴木訳) という考えに基づき、教科書の一部だけではなく、本文のすべてを分析対象とした。またその結果、詳細な分析が可能なデータ量の制約から、本論においては神奈川県において採用率の高い教科書一種 (一冊) のみを分析した。複数の教科書を比較したものではない本論の分析結果が、もしも教科書の評価に影響するようなことがあると公平性を欠くので、ここではその書名は公表せず

に仮に「教科書A」と呼ぶことにする。

2. 2 方法

教材分析や評価に用いられる数多くの方法論のうち、本論ではハリデーの機能文法 (Halliday, 1994) の枠組みに基いた分析方法を用いた。以下に詳述するこの方法はLesikin (2001) の分析法を簡略化したもので、すでに研究の進んでいるテキスト内容のレベルと語彙要素のレベル (「1. はじめに」参照) のいわば中間に位置する、節レベルでの分析が行えるという利点がある。また、コンテクストなしで提示される文も分析可能という点で、そのような例文を多く含む中学校英語教科書の分析に適している。

具体的には以下の分析手順に従った。

1. 教科書Aの本文の中で、性別が特定できる名詞・代名詞 (Alice, him など) を含む節をすべて抽出する。
2. 1で抽出した節中の名詞・代名詞のうち、機能文法でいう「テーマ Theme」部分に位置するものの性別を調べる。テーマは「その節が関わるもの that with which the clause is concerned」(Halliday, 1994: 37 鈴木訳)、または「話者がメッセージのために選択した枠組み the frame the speaker has chosen for the message」(Butt et al., 2000: 136 鈴木訳) などと定義され、通常、英語では節の最初の部分に相当し、また日本語では助詞の「は」で示されることの多い部分である。「その節が関わるもの」であるテーマは、同時に書き手や読み手の関心が向かうものでもあるから、コミュニケーション上一種の重要性を付与されていると考えられる。したがって、この位置にある名詞や代名詞に性別による偏りが見られれば、それはジェンダー・バイアスを反映していると考えられる。
3. 2で抽出したテーマ部分に含まれる名詞・代名詞の、「参与要素機能 Participant function」を同定し、その性別を調べる。機能文法においては、節が表現する「過程 Process」(動詞部に相当する) がいくつかのタイプに分類され、さらにその過程に対して果たす機能によって参与要素 (主語や目的語に相当する場合が多い) が分類される。以下にそのうちの主な過

程タイプと参与要素の機能をHalliday (1994: 106-149) の例とともに示すが、詳細については、Halliday (1994) を参照されたい。なおここでは参与要素の機能については、本論で分析対象とする、節のテーマ部に通常位置するもののみを紹介してある。

「物質過程 Material process」= 物質的世界における行為 (hit, run, eat 等) の表現

例) The lion caught the tourist において、caught が物質過程、the lion が「行為者」を表す。

「行動過程 Behavioural process」= 生理的あるいは心理的行動 (cry, see, listen 等) の表現

例) What are you crying about において、are crying が行動過程、you が「行動者」を表す。

「発言過程 Verbal process」= 発言行為 (say, promise 等) の表現

例) John said 'I'm hungry' において、said が発言過程、John が「発言者」を表す。

「心理過程 Mental process」= 心理状態 (like, know, feel など) の表現

例) Mary liked that present において、liked が心理過程、Mary が「感覚者」を表す。

「関係過程 Relational process」= 属性や関係性 (be, represent, have 等) の表現

例 1) Sarah is wise において is が関係過程、Sarah が「体现者」を表す。

例 2) Tom is the leader において、is が関係過程、Tom が「トークン」を表す。

このように節が表す過程には、動的・自発的な性質の強い「物質過程」のようなタイプもあれば、そのような性質の比較的弱い「心理過程」「関係過程」のようなタイプもある。もしもデータの中で、そのどちらかの過程タイプの参与要素としては特定の性別が多く登場するといったような偏りが見られれば、これもジェンダー・バイアスを反映していると考えられる。

本論では以上の手順に従って分析を行った。データ中、完全に同一の節が複

数出現した場合は、その一つのみを分析対象とした。「Hello, Ken」というあいさつのようにテーマ構造を持たないものは分析の対象外とした。また、参与要素が人間以外の生物の場合は、物語等において擬人化されていると判断できる場合のみ、分析の対象とした。

3. 結果

以下に説明と共に、結果を示す。

3. 1 データ全体と節のテーマ部における（代）名詞の性別

表1に、データ全体に見られた名詞・代名詞の性別と、そのうち節のテーマ部に位置するものの性別を出現数と割合によって示す。

表1 データ全体、および節のテーマ部に位置する（代）名詞の性別

	女性		男性		計	
	出現数	割合	出現数	割合	出現数	割合
全 体	36	43%	47	57%	83	100%
テーマ部	18	41%	26	59%	44	100%

データ中、性別の特定できる名詞・代名詞は83例あり、そのうち女性を表すものが36例（全体の43%）、男性を表すものが47例（同57%）あった。また全体の中で節のテーマ部に位置する名詞・代名詞は44例あり、そのうち女性を表すものが18例（テーマ部に位置するものの41%）、男性を表すものが26例（同59%）あった。まず全体的傾向として、データ中の名詞・代名詞には、女性を表すものの方が男性を表すものより少ないこと、次にコミュニケーション上の重要性を持つと考えられる、節のテーマ部に位置する名詞・代名詞にも、女性を表すものの方が少ないことがわかった。

3. 2 テーマ部に位置する(代)名詞の参与要素機能

表2に、節のテーマ部に位置する名詞・代名詞の参与要素機能と、性別を示す。

表2 テーマ部の(代)名詞の参与要素機能とその性別

参与要素機能	女性		男性		計	
	出現数	割合	出現数	割合	出現数	割合
行為者	4	24%	13	76%	17	39%
行動者	5	63%	3	38%	8	18%
感覚者	2	40%	3	60%	5	11%
体现者	5	50%	5	50%	10	23%
トークン	2	50%	2	50%	4	9%
計	18	41%	26	59%	44	100%

※最右列の割合は各参与要素機能が全体に占める割合を示す

テーマ部に位置する名詞・代名詞44例のうち、行為者の機能を持つものが計17例、行動者が計8例、感覚者が計5例、体现者が計10例、トークンが計4例あり、発言者の機能を持つものは見られなかった。ほとんどの参与要素機能において性別による大きな偏りは認められなかった(出現数の差が2つ以下)が、唯一、行為者の機能を担う要素においては、女性4例(24%)に対し男性13例(76%)と顕著な差が見られた。つまり参与要素機能のうちでももっとも動的・自発的にとらえられる行為者の機能を担う名詞・代名詞には、女性を表すものの3倍程度の頻度で男性を表すものが用いられていることがわかる。以下にデータ中で行為者の参与機能をもつ名詞・代名詞(下線部)を含む節をすべてあげる。

<行為者として機能する名詞・代名詞>

女性を表すもの(4例)

1. She puts them in her locker.
2. A girl is playing the guitar.

3. She practices the drum on Sunday.
4. Tomoko can swim well.

男性を表すもの (13例)

1. Humpty Dumpty sat on a wall.
2. Humpty Dumpty had a great fall.
3. All the King's horses and all the King's men couldn't put Humpty Dumpty together again.
4. He comes here every day.
5. He doesn't change his room.
6. He is sitting in a wheelchair.
7. he is. 「Is Mr Kimura getting in the car?」 という質問に対する返答 「Yes, he is.」 の一部)
8. Some boys are playing soccer.
9. He's playing tennis.
10. An old man is running.
11. Two boys are picking up cans.
12. He lived in the Lake District.
13. He played tennis in the afternoon.

このように教科書Aでは, run, play, pick up, put に代表されるように, 動的・自発的性質の強い物質過程の行為者となる人物は, 女性よりも男性として描かれることが多いことがわかった。

4. 考察

教科書Aは文部科学省検定済教科書であり, そこには, 中学校で使用する外国語教材は「多様なものの見方や考え方を理解し, 公正な判断力を養い豊かな心情を育てるのに役立つ」ものであるべきという学習指導要領の考え方を反映

するための工夫が随所に見られる。たとえば挿絵や写真には、様々な民族・年齢・職業・性別の人物が描かれているし、本文でも、英米豪カナダといったいわゆる「Inner Circle」諸国ではない国々の英語話者を多く登場させたり、また障害を持つ人々の生活を紹介したりしている。

それにも関わらず、機能文法の枠組みを用いて分析した結果、教科書Aにはジェンダーによる偏向が存在することが明らかになった。まず3. 1に示したように教科書Aにおいては、全体を見ても、節のテーマ部分だけを見ても、女性を表す名詞・代名詞の使用が、男性を表すものよりも少ないことがわかった。次に3. 2で示したように、動的・自発的な性質の強い行為をおこなう人物(行為者)は、女性よりも男性として描かれることが圧倒的に多いことが明らかになった。

このようなジェンダーによる「偏向」が、教科書制作者側の「偏見」を示しているとそのまま結論付けることには慎重になるべきであろう。先に述べたように、教科書Aでは様々なバイアスについて配慮した表現や材料の選択が随所に見られるし、同じシリーズの教科書でも上級生用のものではジェンダーに関して異なった傾向が見られる可能性もある。本論で発見された偏向が偶然の産物ではなく、制作者側の偏見を示すものであると判断するためには、より多くのデータを調査する必要がある。

とはいえ、偏見の反映であるにせよないにせよ、教科書Aにおいて、本論で見たようにジェンダーによる偏向が存在することは事実であり、このことが中学校一年生という低年齢の学習者の文化理解・意識形成に何らかの影響を与える可能性が高いことは否定できない。より具体的に言えば、学習者は、教科書Aの文化的背景をなす日本や米国その他の国々の文化においては、女性は男性よりも社会への参加度が低く、また女性が動的・自発的行動を行うことは男性に比べて非常に少ない、というメッセージを無意識のうちに受容することになる。中学校の授業に用いられる教科書は、学習者によって繰り返し読まれ、暗記されることさえ珍しくないから、教科書が発するこのようなメッセージは、一般書の場合よりも影響力が大きいとも考えられる。したがって、教科書Aに見られるジェンダー上の偏向は、日本の社会に様々な形で存在する、「女性は

副次的・受動的な役割を果たすべきである」というジェンダー・バイアスを強化するという、望ましくない結果をもたらす可能性が高いと懸念される。

5. まとめ

本論では、文部科学省検定済の中学校一年生用英語教科書「教科書A」におけるジェンダー・バイアスの有無を、機能文法の枠組みを用いて調査した。その結果教科書Aには、全体として女性より男性が多く登場すること、また節のテーマ部にも男性が配されることが多いことに加え、能動的な行為を行う人物としては女性よりも男性が描かれることが著しく多いというジェンダー・バイアスが存在することが明らかになった。このようなバイアスは視覚的要素におけるバイアスなどとは異なり、一見しただけでは存在が確認しにくいので、教材開発者にとっては完全に排除することが困難なものであろうと察せられる。しかし特に低年齢の学習者に対しては、教科書におけるバイアスは大きな影響を持つと考えられるため、教材開発に際してさらなる配慮が望まれるものである。今後の研究の方向としては、今回の分析で明らかになったジェンダー・バイアスが、他の英語教科書にも共通して見られる問題であるかどうかを明らかにしていくとともに、バイアスを含まない教材の開発に向けて、教材開発に具体的に応用できるようなバイアス排除のための枠組みを開発・提示していく必要があるだろう。

〔引用文献〕

- 伊藤明美 (1999) 「英語教育とジェンダー - 中学校の教科書を中心に -」『藤女子大学・藤女子短期大学紀要』36, 61-83
- 中村桃子 (1995) 『ことばとフェミニズム』勁草書房
- Butt, D., Fahrey, R., Feez, S., Spinks, S. and Yallop, C. (2000). *Using Functional Grammar: An explorer's guide. (2nd ed.)* Sydney: Macquarie University.
- Byram, Michael (1989). *Cultural Studies in Foreign Language Education*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Halliday, M. A. K. (1994). *An introduction to functional grammar. (2nd ed.)* London, Melbourne, Auckland: Edward Arnold.
- Hartman, P. L. and Judd, E. L. (1978). Sexism and TESOL Materials. *TESOL Quarterly*, 12 (4), 383-393.
- Jaworski, A. (1983). Sexism in textbooks. *British journal of language teaching*, 21 (2), 109-113.
- Kanemaru, F. (1998). Sexism in English textbooks published in Japan. *Language teacher*, 22 (5), 11-13.
- Lesikin, J. (2001). Determining social prominence: A methodology for uncovering gender bias in ESL textbooks. In D. R. Hall and A. Hewings (Eds.), *Innovation in English Language Teaching*. 275-283. London: Routledge.
- Ma, K. (1998). The representation of gender in current ESL reading materials. *The ORTESOL journal*, 19, 1-12.
- Porreca, K. (1984). Sexism in current ESL textbooks. *TESOL Quarterly*, 18 (4), 705-724.
- Valdes, J. M. (ed.) (1986). *Culture Bound. Bridging the cultural gap in language teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.